

ワクチン接種の効果は

大半が変異株
「サブクレードK」

インフルエンザ流行続く



インフルエンザワクチンを接種する人が相次ぐ苦小牧東病院

とみられ、医療機関がワクチン接種を勧める一方で、「ワクチンを打っても感染した」「変異株に対する感染予防効果はない」との声も聞かれる。人と会う機会が増える年末に向けて、ワクチン接種と感染予防について聞いた。

国立感染症研究所の調査では、9月から11月5日までに国内で採取したウイルスのうち96%がサブクレードKだったといい、嶋倉さんは「今季の流行はほとんどがサブクレードKとみられる」と指摘。同ウイルスは感染力が高く、重症化リスクはこれまでと変わらないとされる。

嶋倉さんは「ワクチンを接種したからといって、インフルエンザにかからないというものではない」と説明。子どもはワクチン接種で7割程度の感染予防効果が

が期待できるが、18歳以上の大人は3〜4割程度に下がる上、現在出荷されているワクチンはサブクレードKの流行前に選定されたため、さらに感染防止能力は下がるという。

それでも、「ワクチン接種により体内のウイルスの数を抑えることで重症化リ

スクが減り、他の人にもうつしにくくなる」と解説。マスク着用やうがい、手洗いといった基本的な対策に加え、「重症化リスクの高い高齢者や高齢者と接することが多い人は特にワクチンを打った方がいい」と話す。

(神部造)

苦小牧市内でインフルエンザの流行が続いている。苦小牧東病院(明野新町)の感染管理認定看護師嶋倉

昌貴さん(43)によると、感染者の大半がインフルエンザA型の新たな変異株「サブクレードK」が原因